

現代哲学として徳を研究するとは

オーガナイザー
提題者

立花幸司(千葉大学)
笠木雅史(広島大学)
飯塚理恵(日本学術振興会/関西大学)
立花幸司(千葉大学)

ここ十年ほどで、日本の哲学業界において「徳」「徳倫理学」「徳認識論」という言葉が広く認知されるようになってきたように思われる。「徳」は古代ギリシア哲学等の解釈研究の対象であり、いわゆる現代哲学の営みとは一線を画すという認識は、現在ではかなり薄まってきているのではないだろうか。実際の認知度や印象などは別途研究を待たねばならないが、徳概念の哲学業界への浸透の背景には、先達の取り組みが大きいことは是非とも指摘しておきたい。特に、日本において古代哲学研究の枠から飛び出してこの概念が大々的に注目を集めた契機となったのが、1993年の日本倫理学会のシンポジウム「徳倫理学の現代的意義」である。そのシンポジウムで、「徳倫理学などという言葉は聞いたことがない」という指摘に賛同されこそすれ否定されなかった当時の状況と比較すれば、「広く認知されるようになってきた」という私見もあながち間違いではないだろう(i)。

しかしながら、日本の哲学業界における「徳」の扱いは、依然として西洋の基本文献(の一部)の翻訳とその解説が多くを占めており、実際に「研究」として取り組む者はまだ多くない。そこで本WSでは、実際に取り組んでいる二名に立花を加えた三名により、現代哲学として徳を研究することについて検討をおこなう。各々のやり方を「事例研究」として、会場にお集まりの人たちとともに徳について現代の哲学として研究する可能性を検討し、拓いていく場となれば幸いである。

提題1. 笠木雅史「徳倫理学、徳認識論の再整理」

現代哲学において徳を中心に展開される立場は、倫理学と認識論で独立的に発生し、それぞれ「徳倫理学」、「徳認識論」と総称される。両者は独立的に展開されたため、徳を中心に置くという点以上に、それらに共通性があるのかは、それほど自明ではない。さらに、「徳倫理学」、「徳認識論」と呼ばれるものの内実が多岐にわたり、その内部でさえ統一性があるのかは自明ではないというのが現代の議論状況である。本発表では、徳倫理学、徳認識論がどのようなものなのかという点について、再整理を試みる。本発表の要点は、以下の二点である。(1)徳倫理学、徳認識論は、それらに対置されてきた(倫理学における義務論、功利主義、あるいは認識論における内在主義、外在主義などの)従来の諸理論と対立するものではない。なぜなら、(2)徳倫理学、徳認識論は従来の理論が扱おうとしてきた問題の多くを扱わず、新しい種類の問題に取り組むものだからである。

提題2. 飯塚理恵「スタンドポイントと認識的徳」

本発表では、スタンドポイント認識論が徳認識論にどのような含意を持つのかという問題に取り組む。徳認識論者は善い探求者として生きるためには、特定の特性の涵養・発揮、または、別の特定の特性の回避・克服が重要だと考えてきた(ii)。善い特性は認識的徳と呼ばれ、悪い特性は認識的悪徳と呼ばれている。その中でも認識的謙遜の徳は多くの論者を惹きつけてきた。現在まで徳や悪徳は様々なバックグラウンドを持った人々に対して同様の仕方でも語られてきた。それに対して、フェミニンスタンドポイント理論は、一見社会の中で権力を持たず、経済的にも特

権的な立場にないものたちの知識が、支配者側にいるひとたちのもつ知識よりも認識的特権を持つことがあると主張する。ただし、こうした特権は社会的タイプから本質的に帰結するのではないことは広く認められている。被支配側にいるもの達はその社会の中で生き抜くために、自分の見方だけでなく支配者の立場からも社会を観察し、そうした二つのレンズを通して世界を理解する必要に駆られる。そうした切迫性から、認識的に望ましい意識や能力を獲得する者がいるのである(iii, iv)。スタンドポイント認識論の主張を真剣に検討すれば、認識的な徳を考える際にも、ある人の社会的タイプがその人の「知り方」に影響するという事実注目しなければいけないだろう。こうした認識の社会化の流れは徳認識論内部からも生じている(v)、社会に位置づけられた知のあり方をより広範に検討することで、スタンドポイント徳認識論という新しい領域が開かれると考えている。ただし、特定のスタンドポイントが認識的特権を持ちうるのは実社会の知識に限られるため(vi)、全ての認識的徳にスタンドポイントがかかわるわけではない。スタンドポイント依存的な徳とは別種の徳として、社会的タイプを超えて涵養すべき徳も存在する。本発表では最後に、こうした異なる種類の徳の境界問題に取り組む。

提題3. 立花幸司「グローバル課題と倫理的徳の学び」

徳とは教養学ばれるものであるという考え方は、プラトン・アリストテレス以来の伝統ある考え方であるが、この論点自体は、(恐らく様々な理由から)あまり哲学として取り組まれてこなかった(1)。他方で、教育哲学や政治哲学など学校教育や市民教育を論じる文脈では徳の教育が話題となっているなど、領域ごとに「徳」とその教育が議論されている。この発表では、国際関係などのグローバルな課題を取りあげ、P・シンガーが功利主義に基づいて提案をしたように、徳倫理学の観点から提案を行う。そして、徳の学びがそうした課題の解決に有効であることを論じる。

謝辞

本WSは、提題順に以下の研究費の成果の一つである。

- ・ 科研費基盤C「認識的、実践的、倫理的理由と信念の規範的身分の動的性格」(代表:笠木雅史)
- ・ 学振特別研究員奨励費「徳認識論と認識的パターンリズム—ケア倫理的観点から—」(代表:飯塚理恵)
- ・ 科研費基盤B「哲学、教育哲学、教育実践を架橋した共同研究による新たな徳認識論の理論の構築」(代表:立花幸司)

参考文献

- 立花幸司. 2021.「現代徳倫理学について:理論の概要、日本における始まり、教育という論点」『フィルカル』6(2): 82-110.
- Zagzebski, L. 1996. *Virtues of the Mind*. Cambridge University Press.
- Collins, P.H. 1991. *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. Routledge.
- Wylie, A. 2003. "Why Standpoint Matters." In *Science and Other Cultures*, edited by S. Harding and R. Figueroa, 26-48. Routledge.
- Fricker, M. 2007. *Epistemic Injustice*. Oxford University Press.
- Tanesini, A. 2019. "Standpoint Then and Now." In *The Routledge Handbook of Social Epistemology*, edited by M, Fricker, et al., 335-43. Routledge.